



「おしっこ」の色は、なぜちがうときがあるの

「おしっこ」の色のこさかわるのは

おしっこの成分の大部分は水ですが、そのほかに尿素・りん酸・カリウム・塩素・ナトリウムなどがふくまれています。

おしっこの色は、ふつうはうすい黄色ですが、上のようなおしっこの成分が増えると、色がこくなり、水分を多くとると色がうすくなって、ほとんど無色になります。

「おしっこ」にほかの色がつくのは

赤い色素で着色した飲み物や食べ物、薬などをたくさんとると、おしっこの色は、ふつうの色とちがう色になることがあります。

たとえば、赤い色素で着色した飲み物やおかし、ムラサキキャベツなどをたくさんとると、おしっこの色は、うす赤色になります。

また、病気などでいろいろな薬を飲んだ場合にも、おしっこの色が変わることがあります。たとえば、ビタミン剤では黄色に、アスピリン（解熱剤）では赤色に、サリチル酸（痛み止め）では黄色からオレンジ色までなどです。

病気や大けがでもおしっこの色は変わる

病気で高熱が出たり、大けがをした場合にも、おしっこの色は変わることがあります。

病気で高熱が出ると、おしっこがこくなって、茶色に近くなり、肝臓病の場合には、かなりこい茶色になります。

筋肉、特に骨格筋に大けがをした場合、おしっこは赤色または茶色になります。

しかし、おしっこの色の变化だけでは、病気を見つけることはできません。

（監修・保志 宏）

